

大学院理工学研究科への案内



理工学研究科委員長

すぎやま たかかず
杉山 高一

理工系では80%以上の学生が大学院に進学する大学もある。5年程前にある私立大学の理工学部の教授に所属学科の大学院進学率をお聞きしたら約60%という答えが返ってきた。世界規模で活躍している企業は大学院卒業者を優先的に採用し、その企業の頭脳の部分に当たる職種での活躍を期待している。必然的に配属先は、企業の中核である研究所、研究開発部門等、高度の専門的な知識を必要とする部署になる。私の所属している数学専攻は、電気電子、精密機械、・・・という工学系の専攻に比べると、世の中の需要は少ない。それでも学生数の何倍にもなる多くの企業から採用希望がよせられている。私の専門は統計数学であるが、今年も昨年も大学院卒しか採らない専門職である製薬企業の統計解析課に採用されている。また、2年続けて銀行の数理ファイナンスの専門家へのコースで採用されている。生命保険会社、損害保険会社等では、保険代理人(アクチュアリー)の候補者として採用されている。以上は大学院卒であるから就職できる機会に恵まれたのである。大学院で統計数学を専攻し情報関係の企業に勤める大学生もいるが、学部とは違った扱いを受けるのは当然で、これは情報技術が急速に発達し高度化したことによって、企業が優秀な人材を求めているからである。数学の教員を目指している学生もいるが、一番上の資格である専修免許を取得して、有利な条件で職を得ている。私の研究室のことを述べたが、これは中央大学大学院理工学研究科に約100ある研究室の1つの例にすぎない。また数学専攻の統計数学をあつかう研究室ということ

もあつて偏りがあることと思うが、大学院卒業生の世の中の需要を考える上で参考になるであろう。明確に言えることは、さらに2年間の勉強によって、その後の仕事の内容が大きく変わることである。特に理工系では大学院で勉強し、学部教育とあわせて6年で大学教育が完結するような状況になってきている。なかにはさらに博士後期課程に進学し、大学の教員になっていく学生もいる。人間20代での10年間は最も大切な時期である。この時期に自分自身を磨き、自分の能力を最大限に伸ばした人が、30代、40代で相応の地位を占め、重要な仕事をすることになり、それが50代以降につながっていくのである。大学院進学を自分の将来設計と結びつけて真剣に考えていただきたい。

中央大学大学院の授業料は国立大学と同じにしてある。希望者には日本育英会奨学金と中央大学貸与奨学金のいずれかが受けられるように奨学金制度が設けられている。これは高度の専門知識をもって社会へ巣立つていただきたいという大学側の強い願いがあるからである。

本学理工学研究科は真理の探究、科学技術の創造と開発能力の育成のため、学科目履修制度、カリキュラム、教育・研究環境などの改革・充実を行ってきた。また、本学は先端技術と密接なつながりのある高性能の研究設備を数多く配置し、それらを有効に大学院の教育・研究活動に活用している。

数学専攻・物理学専攻・応用化学専攻・情報工学専攻では、お茶の水女子大学大学院と、研究・教育の充実を図ることを目的とした単位互換制度を実施している。現在は数学専攻に限られているが、上智大学など6大学との単位互換制度も実施している。その他にも、東京都立大学、東京外国語大学等の大学院と大学間協定で単位互換制度を実施している。例えば、お茶の水女子大学は理工学研究科から地下鉄丸の内線で1駅、バスで7分歩いて20分程なので、30人程の学生が単位互換制度を活用している。

我が国の国策である科学技術創造立国の将来は大学院で学ぶ方々の双肩にかかっている。このような国策は別にして、ご自分の能力をさらに伸ばしていくよう、大学院進学を真剣に考えていただければ幸いです。